

講演題目：人間は合理的動物である*

立花 希一

秋田大学教育文化学部

1. 講演者紹介にからめて：

私の経歴紹介をしてくださりありがとうございました。但し、紹介された私は少し前までの過去の私です、ここにいるこの私が今の私です。この今の私は過去を背負った私ですが、今の私が未来を切り拓いていける可能性のある、時代の最先端の私です。皆さんも今という最先端の自己をもつ個であって、その点で平等です。また個々人はいろいろな考え方や感じ方をもつことができるという点で自由でもあります。

2. 今日の会の経緯：

GHQの最高司令官だったダグラス・マッカーサーには、「老兵は死なずただ消え去るのみ」という有名な言葉があります。この言葉にあやかって、私もそっと静かに大学から消え去ろうと思っていたのですが、11月半ばに、卒業生の佐々木周子さんが研究室にやってきて、卒業生に声をかけるので最終講義で何か話してくださいと言われました。話をするのは私の仕事なので二つ返事で引き受けましたが、その際二つの条件を出しました。

今回の話がおそらく最終講義ではないので、「最終講義」という名称はやめてもらいたいこと、卒業生と飲みたいので懇親会を是非やってもらいたい、しかも、中間発表会等の後のいろいろな懇親会で学生とよく利用してきた思い出深い「やしち」でやりたいということでした。話の後、すぐに飲み会に突入できるように夕方から始めてもらうことにもしました。

年明けに、人間文化講座主任の大西洋一さんから連絡があり、最終講義等についてどのように考えているのかという問い合わせがありました。そこで、実は、卒業生を交えて定年退職記念講演会と懇親会をすることになっており、しかも日時も決まっている旨、伝えました。こうして、卒業生と人間文化講座教員による合同の会を開催していただけることになったわけです。このような場所と機会を与えてくださり、また多くの方々にお集まりいただき感謝しております。

3. 導入

今年は明治150年の年です。政府主導で明治ばかりではなくさらには戦前全体をも

* 本稿は、2018年3月17日に開催された定年退職記念講演会の講演に加筆・修正したものである。

glorify (栄光化・美化) する動きが見られます。しかし、どんな時代にも悲劇と栄光、明と暗があり、どんな歴史的イベントも全面的にいいものなどありません。戦前の日本は、1894年の日清戦争以来第一次世界大戦まで10年毎に戦争をしており、さらに、1931年の満州事変から始まって15年もの間戦争を行い、ようやく1945年に敗戦を迎えました。その間、国内外で多数のひとびとが戦争の犠牲者となりました。

私の両親の世代は戦争体験者で、戦地で戦死したり空襲で亡くなったりして、家族や恋人、友人を失っています。父は戦争の話をしませんでした。一度だけ、酔っぱらっていたせいでしょうか、自分の親友は戦死した、自分より優秀なかれが死んで自分は生き残ったと言ってさめざめと泣いたことがありました。また母を一番可愛がってくれていたという母の長兄はアッツ島の玉砕で戦死したそうです。しかし、両親は幸か不幸か結婚し子どもまで設けました。1952年サンフランシスコ講和条約発効の年、私が生まれました。もし私の両親が結婚していなかったら私は存在しなかったわけで、さらには、娘も孫も存在していないわけです。因みに、先に言及したマッカーサーの有名な言葉が述べられたアメリカ議会における退任演説は1951年で、講和条約調印の年でもあります(因みに、「老兵は死なずただ消え去るのみ」という言葉は、“Old soldiers never die, they just fade away.”という外電の英語を、当時、時事通信社外信部に所属していた父(立花丈平)が翻訳し新聞に流れたものです)。

4. 思想的背景

御承知の方も多いと思いますが、私の思想・立場はポパーなくしてありえません。そのポパー思想との出会いですが、1973年、私の卒論の指導教官だった高木勘弼先生が、「これまで私はテキストを使って授業をしたことは一度もないのだが、今回はポパーの科学哲学の主著『科学的発見の論理』をテキストにする」と言われて始めた講義を受講したときで、そのときポパーの名前を初めて知りました。『発見の論理』を読んで、ポパーが帰納主義でも約束手義でもない、第三の道(反証主義)の提案をしていることがわかりました。もう少し広い文脈で言えば、独断主義でも懐疑主義でもない、第三の道(批判主義)の提案ということになるかと思います。独断的な哲学者に見られるような「私の発見した真理を受容せよ」といった尊大で傲慢な態度はみじんもなく、自分とは異なる見解と比較対象できる形で自分の見解を提示するだけで、どの見解を受容あるいは拒否するかは読者の主体的な判断に委ねるという態度に魅力を感じました。

その当時は米ソ超大国の時代で、しかも体制選択の問題(自由主義陣営か社会主義陣営か)がありました。また革命を志向する学生運動が活発な時代でもありました。

ポパーは科学哲学者であるばかりではなく、社会哲学者・政治哲学者でもあります。私はこのような政治的な問題状況のなかで、かれの社会哲学、政治哲学の主著『自由社会の哲学とその論敵』、武田弘道訳、1973年とモーリス・コンフォースの『開かれた哲学と開かれた社会ーカール・ポパー批判』、城塚登訳、1972年を比較検討して、私は

前者に軍配を上げました¹。因みに、ポパーの本が翻訳出版されたのは 1973 年ですが、ポパーの本に対する批判書の翻訳のほうがその前年の 1972 年に出版されるという奇妙な現象があります。これは、当時の日本における政治思想の状況を反映したものでしょう。因みに、小河原・内田訳の『開かれた社会とその敵』が出版されたのは 1980 年です。

大学 3 年次以来、ポパー思想と深くかかわってきましたが、1980-3 年、イスラエル、テルアビブ大学に留学し、ポパーの弟子アガシに師事しました。因みに、1902 年生まれのポパーと 1927 年生まれのアガシの年の差は 25 歳で、アガシと私の年の差も奇しくも 25 歳です。

2000 年にアガシ夫妻が来日し、秋田にも来ていただきミニ講義等もしてもらいましたが、それ以後、開かれた社会の観点から、日本の近現代の社会、政治、歴史を考察するようになりました。それまでは、このような問題に取り組んでいなかったのですが、その原因は、私には長年、次のような思い込み・勘違いがあったからでした。すなわち、哲学者は普遍的な問題に取り組むべきであり、日本人だからといって、日本という特殊な社会を扱うのはナショナリスティックなのではないか？ ナショナリズムの罠にはまってしまわないか？という思い込み・勘違いです。この勘違いを克服するのに、ロックの『市民政府論』あるいは別のタイトルでは『統治論』で使われている重要な概念である、political society (civil society) がきわめて有効でした。私は日本という political society (政治社会) の一員として、日本の政治の在り方に対する責任があることを自覚するようになりました。日本の問題に取り組むからといって、自動的にそのひとが、ナショナリストになるわけではないということを悟りました。

5. 配付資料：

さて、配付資料ですが、先ず、英語の拙稿 2 本およびその邦訳 2 本で、先に述べた、開かれた社会の観点から、日本の近現代の社会、政治、歴史を考察したものです。そのうち 1 本の翻訳は今年度の思想演習 II (旧課程では現代思想論演習 III) の授業で学生と共同作業した結果として生まれたもので、もう 1 本の翻訳は、今日の会のために私自身が翻訳したものです。英文と翻訳を対照させて読んでいただければ幸いです。

次に魁新聞 2 本の記事です。経済問題が重要な政治問題であることは間違いありませんが、ただそれだけではないはずで、株価の値上がりなど経済的利益といった目先の政治だけに囚われないで、政治を長いタイムスパンで見ることの重要性に気づいてもらいたくて執筆したのが、「池田・ロバートソン会談の影響」上・下です。自民党による改憲の試みや愛国心教育の取り組みが今に始まったことではないことが如実にわか

¹ 拙稿、「ポパーと社会主義」、筑波大学哲学・思想学会、『哲学思想論叢』、第 3 巻、1985 年、15-27 ページ。ポパー哲学会編、『批判的合理主義 (第 1 巻) 基本的諸問題』、未来社、2001 年、再掲、282-295 ページ、参照。

と思います。少なくとも、下の1. 日本防衛隊と援助のハ、およびそれに対する私のコメントを読んでいただければ幸いです。先に明治150年に言及しましたが、ペリーの黒船来航以降から今日にいたる日本の歴史を国際関係の中から考察して、自分なりの見解・立場を模索することは未来を展望するうえで、とても重要な作業かと思います。

もう1本の記事は、改憲が政治日程にあがっている今の現実政治に対処するために執筆した、「立憲主義は憲法の原理」です。政治問題を考える際には、長期的な観点からの対応と喫緊の課題に対する対応の両方が不可欠だと思います。

実は本日の演題を何にするかで若干悩んだのですが、秋田活版印刷から本日17日の会には抜き刷りの入手が間に合うとの確証が得られたので、それを題材にすることに決めました。3月9日に納品されたできたてほやほやの最新の拙稿、「合理性の諸相」です。この拙稿も配付してあります。

さらに、ゼミ学生の卒研題目一覧と私が執筆した論文等の一覧を合わせたものです。私の学術論文は40本で、卒業研究は70本もあります。学生のほうが研究業績があるというわけです。

さらにもうひとつ、魁の記事があります。冒険家高橋大輔氏との対談ですが、これについては後で言及します。

実はもうひとつ、これから配布するレジюмеがあります。「人間は合理的動物である」という主張の理論的背景・舞台裏」です。この会では、主としてこのレジюмеに基づいてお話しするつもりでいます。

6. 人間は合理的動物である

講演題目は、「人間は合理的動物である」となっていました。実は、「人間は合理的動物である」という主張そのものではなく、今述べたように、今日の講演では、「人間は合理的動物である」という主張を成立させるための理論的背景を中心に話すつもりでいます。さらに、この6以下8までは、その予備的考察になっています。

高校の倫理にも登場しますが、人間にはいろいろな定義（直立二足歩行、遊ぶ、工作する等々）があります。

そうした定義のひとつ「人間は理性的動物である」は聞いたことがあると思うのですが、「人間は合理的動物である」は、聞いたことがないのではないのでしょうか？

先ず、訂正してお詫びしなければならないことがあります。秋田大学に赴任してから30年間、倫理学概論等、アリストテレスによる人間の定義だとして、理性的動物を紹介し続けてきました。哲学史の常識²では、「人間は理性的動物である」というのが、アリストテレスの有名な定義であるとされているからです²。例えば、定評のある『スタンフォード哲

² 実は、アリストテレスには「人間はポリス（社会・政治・国）的動物である」という明確な定義がある。『政治学』1253a2-3。ポリスの成立について、人間言語（ロゴス）と関連づけて述べられているのだが、この箇所では「ロゴスの動物」とは定義されていない。

学事典』では、『形而上学』でアリストテレスが人間を理性的動物と定義したと記載されています。しかしながら、少なくとも、アリストテレスはプラトンが直截に行ったような人間の定義を、アリストテレス自身はどうも行わなかったようです（拙稿『合理性の諸相』執筆のために、明言された箇所を今回、私が『形而上学』で探索しても見つからなかったわけです）。

プラトンは、動物を四足動物か二足動物か、羽毛を生やした動物か体毛のない動物か、という二つの基準によって分類し、人間を「(羽毛のない) 二足歩行の動物」と定義しました（『ポリティコス』、266E）。

本質記述によってのみ正しい定義がなされると考えていたアリストテレスは、二足歩行を白さや教養と同様、人間の本質ではなく、付带的（偶有的）とみなしたので、プラトンの定義を受容しなかったことは明白です（『形而上学』、1006a31-2007b18, 1037a）。

7. 人間はロゴスの動物である。

「定義」という言葉は使用されていませんが、アリストテレスが間接的に定義したとみなせる箇所があるのが、『形而上学』ではなく、『ニコマコス倫理学』です。原語は *lógon échontos* で、*échontos* があるため *lógon* となっていますが、*lógos*³ のことです。音訳借用では、「人間はロゴスの動物である」となるでしょう。人間は生物ですが、栄養を摂取し成長するだけの植物ではないこと、感覚的である点では動物と同じですが、他の動物にはない *lógos* という人間固有の活動があることによって、人間は他の動物と本質的に区別されることが論証されています。

アリストテレスの著作にはない後世のフレーズであるギリシャ語の “*zōön lógon échon*”⁴ がラテン語では、“*animal rationale*” と翻訳借用されました。それが、英語

³ 『ニコマコス倫理学』の邦訳では、*lógos* が「分別」や「理り」と訳されている（英語では、“*rational part*” である）。ヨハネの福音書、1章の「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」で「言」と訳されているのもロゴスである。ロゴスは宗教的文脈でも使用される概念である（因みに、ヘブライ語ではダーヴァールがそれに相当する）。*lógos* は古代ギリシャ哲学に限ってもヘラクレイトス以来の伝統があり、その結果、多義的な概念になっている。ピーターズの辞典においても、*speech*, *account*, *reason*, *definition*, *rational faculty*, *proportion* と訳されているが、ピーターズによれば、アリストテレスは、*lógos* をしばしば *hóros* あるいは *horismós* (*definition*) と同義に用いているという。この意味で理解すると、人間は「定義を操る動物」となるだろう。もうひとつの典型的なアリストテレス的な使用法は、*reason*, *rationality* であり、それは倫理的な文脈でも用いられているという。さらには、ピュタゴラスの伝統を受け継いで、数学的な比、割合 (*ratio*) として解してもいるという。F. E. Peters, *Greek Philosophical Terms: A Historical Lexicon*, New York University Press, 1967, p. 111. 日本語では、比で表すことができる割り切れる数を「有理数」、割り切れない数を「無理数」というが、英語では、“*rational number*”、“*irrational number*” という。日本語では、「有理数」と「非有理数」とも訳せるだろう。定義を操ったり、数学の計算をしたり、道徳的な判断をしたりという行為は、広義の「合理性・理性」に関わるとみなすことができる。したがって、人間の定義は、「理性・合理性を所有する生物（動物）である (*zōön lógon échon*)」という結論になるはずである。要するに、人間は、*animal rationale*, *rational animal* (理性的・合理的動物) である。

⁴ *zōön* は生物 (*living things*)、*échon* は、所有するという意味であり、したがって、人間

では、“Man is a rational animal”と訳され、ギリシャ語からではなくラテン語を語源とする“rational”という言葉が用いられるようになったのです。rational の名詞である rationality は、ラテン語の rationalitas、rationalis に由来し、理性と訳される reason は、ラテン語の rationem に由来する言葉で、しかも、この二つの語源は、reri (to reckon、to calculate、to infer、to think に相当) です。

rationality は、日本語では、「合理性」と訳されるのが普通です。それに倣って訳せば、rationality の形容詞である rational は「合理的な・合理的」となるので、「人間は合理的動物である」という訳になるのが自然でしょう。

ところが、「人間は合理的動物である」という訳を私は寡聞にして知りません。その理由は私には不明ですが、似通っているはずの「理性・理性的」と「合理性・合理的」という言葉は、日本人の語感では、どうもかなり異なるものとして捉えられているようです。極端に言えば、前者には肯定的イメージがあり、後者には否定的イメージがあるようです。

8. 理性と合理性

哲学概論ではなく、倫理学概論の授業だからかもしれませんが、学生のレポートを読む限り、多くの学生が、理性を欲望や感情を制御するもの、悪への衝動を抑制するものとみなしており、しかも、理性の働きを良きものとして肯定的に捉えていることがわかります。「人間は理性的動物である」という人間の定義における「理性」もまた、欲望や本能のままに行動する動物とは異なり、人間は理性によって欲望や本能をコントロールすることができるので、まさにこの点で、人間は他の動物とは異なるとみなしているようです。

他方、合理性は、日本では科学・技術が語られる文脈でよく用いられます。極端な言い方をすると、合理性の追求が目的の科学技術の発達によって、産業が合理化(機械化、オートメーション化)され、その結果、人間疎外を招き、また公害・環境汚染等によって、人間や地球の滅亡の危機を招いていると。また、合理化によって、人件費削減のための首切り(労働者解雇)が行われることに対する労働争議のスローガンとして「合理化反対」が用いられたりします。「合理化」は、さらには、いわゆる「イソップの酸っぱいブドウの論理」にみられる自己欺瞞、自己正当化の表現としても用いられています。いずれの場合も、否定的な意味合いをもっていることがわかるでしょう。

しかしながら、われわれは、日常生活において多かれ少なかれ合理的な行動をしており、しかも、むしろあまりに当然のことなので、それに気づかないだけなのかもしれません。例えば、三角形の土地を囲む道路があるとして、今あなたがそのひとつの角において、目的地がもうひとつの角であると仮定しましょう。その時、あなたは、二辺の道路

は *lógos* を所有する生物(植物ではないことから動物)ということになる。

を通過して目的地に行くのでしょうか。おそらく、必ずといっていいほど⁵、一辺の道路を通過でしょう。なぜ？そのほうが、目的地に早く楽にたどり着けるからです（経済的、効率的、効果的な目的達成）。これは一例にすぎませんが、要するに、ほとんどすべての行動において、われわれは多かれ少なかれ合理的な行動をしているのです⁶。

また、不可解な事件とか理不尽な事件が起きたとき、普通、その原因や理由を探してその事件を説明しようとする。その際、非合理的な説明を説明とみなすのでしょうか？非合理的な説明では説明になっていないと判断するのではないのでしょうか。合理的と思える説明だけを説明と呼ぶのではないのでしょうか。したがって、そもそも説明とは合理的な説明でなければならないのだと思います。この点でも、人間は合理性を追求しているといえるのではないのでしょうか。実はここまでは予備的考察でした。今日の本題は、「人間は合理的動物である」というよりむしろ、「人間は合理的動物である」という主張を成立させている理論的背景と言えれば格好いいのですが、その舞台裏を話すことです。

9. 「人間は合理的動物である」という主張の理論的背景・舞台裏

演題変更についてはすでに言及しましたが、「人間は合理的動物である」から、「人間は合理的動物である」という主張の理論的背景・舞台裏に変更したのは、理由があります。人間は合理的動物ですか？と問われたとき、大きく分けて、イエスかノーかの二つの答えがあると思います。ノーと答えるひとは、人間には非合理的の側面もあるから、人間は合理的動物とは言えないと判断しているのではないのでしょうか。他方、イエスと答えるひとは、人間はまったく非合理ではなく合理的な面もあるから、人間は非合理的動物とは言えず、したがって、人間は合理的動物であるといえると判断しているのではないのでしょうか？どちらの答えが正しいのでしょうか？それとも、どちらも間違っている、あるいはどちらも正しいのでしょうか？各人が自分の判断の基準に固執する限り、この問題の決着はつきません。私は、後者のイエスと主張する立場ですが、この立場を理解してもらうために、その理論的背景・舞台裏についてお話ししようと思った次第です。この理論的背景には、いくつかの要素がありますので、それを順次話していきたいと思えます。

⁵ 「必ず」と書いていないのは、目的によっては、回り道をして二辺を通ることのほうが合理的な場合もありうるからである。例えば、待ち合わせの時間に着くには一辺の道だと早すぎるし、この頃、運動不足なのでその解消のために、とてもいい機会だと考えて、二辺の道を選ぶこともありうる。このような事例からも、目的によって何が合理的なのかが変化することがわかるだろう。合理性は目的に依存し、目的と相関的である（「合目的合理性」とか、「手段としての合理性」と呼ばれるゆえんである）。

⁶ 講義において、このような例をいくつか挙げて合理性を説明すると、「人間って実に合理的なんだ」ということを多くの学生に実感してもらえる。こうした行動は、普通、ほとんど無意識になされるが、意識化することも可能である。

(1) ポパーの非対称性 (asymmetry) の洞察

ポパーの思想の特徴として、物事の対称性ではなく非対称性に注目することが挙げられます。その一つが反証と実証の非対称性です。

1) 反証と実証の非対称性：

ポパー自身、反証と実証の相違を非対称性に訴えて説明しています。論理的な意味で、理論の実証は不可能だが、反証は可能であり、可能性という点で対称性は成立しないと主張するのです。詳しくは、拙稿、「デュエム＝クワイン・テーゼと反証主義」、『批判と挑戦』、未来社、2009年、141-178ページ、を参照していただければと思います。もうひとつ、ポパー自身が非対称性の存在を指摘しているものに、肯定的功利主義と否定的功利主義の相違があります。

2) 肯定的功利主義 vs. 否定的功利主義：

肯定的功利主義とは、次のような考え方です。ある社会において選択可能な二つの公共政策があるとしましょう。二つのどちらかを採用した場合によって結果が異なる、その社会の各構成員の幸福（快）と不幸（苦）を、ベンサムは「快樂計算」によって計算します。その快と苦を差し引きし、各人の相殺結果を出し、その総計を計算し、全体としてより大きな幸福（快）を生む方の政策を選択し、その政策が立法化されれば、その法は正義に適ったものとなるというのです。

ポパーは、『開かれた社会とその敵』で、この「幸福の最大化」の原理を批判しました。ベンサムの「快樂計算」では当然視されているのですが、個人について、当人の苦を快によって相殺することはできないし、いわんや、ある人の苦を別の人の快で相殺することなどできません。したがって、最大多数の最大幸福は不可能ですし、道徳的にも望ましくないというのです。それに代わって、(実現可能な) 不幸の最小化を提案しました（原理としてではありません）。

非対称性をどこに見て取ることができるのかをここでは具体的に述べませんが、暇なときに考えてみてください。次の、閉じた社会と開かれた社会の間にある非対称性については、ポパー自身は言及しておらず、私が見出したものです。

3) 閉じた社会と開かれた社会（後でも取り上げます）

ポパーは、呪術的 (magical)、部族的 (tribal)、集団主義的 (collectivist) 社会を閉じた社会と、個人が個人的決定に直面する社会 (The open society is one in which individuals are confronted with personal decisions.) を開かれた社会と呼びました。閉じた社会の特徴に対応する形で開かれた社会を特徴づけるとすれば、呪術的に対して科学的 (scientific)、部族は個別的・特殊のですから、部族的に対して普遍的 (universal)、集団主義的に対して個人主義的 (individualist) となるはずですが、開かれた社会を、ポパーは科学的、普遍的、個人主義的社会として特徴づけてはいないことに注意してください。ここに非対称性を見て取ることができると思います。ポパーによれば、どんな社会にも、呪術的、部族的、集団主義的側面が存在します。だとすれ

ば、ポパーの基準によれば、すべての社会は閉じた社会であるということになるのでしょうか？実はそうではないのです。どんな社会にも呪術的、部族的、集団主義的な側面が残っているとすると、ポパーによれば、ひとがタブー等、上記の側面に対してある程度批判的であることを学んでいる社会 (the open society is one in which men have learned to be to some extent critical of taboos) は、閉じた社会ではなく、開かれた社会とみなされるのです。この点について、後でまた少し詳しく考察します。

次に、ピュタゴラス以来の古い哲学的伝統に二分法があります。

(2) 二分法 (dichotomy) 的思考

1) ピュタゴラス派の表

次に掲げるのは、有名なピュタゴラス派の表です。

限り	無限なるもの
奇	偶
一	多
右	左
男性	女性
静止しているもの	運動しているもの
直	曲
光	闇
善	悪
正方形	長方形

山本光雄訳編、『初期ギリシア哲学者断片集』、岩波書店、1972年、22ページ⁷。

この二分法の表の中身の考察には立ち入りませんが、この表の各項目における対比の基準が実に多様なことはすぐに気づくだろうと思います。少なくとも、矛盾概念なのか、反対概念なのかの相違に注目することは有意義でしょう。

2) すべてか無か (all or none) 、あれかこれか (either or)

vs.

多かれ少なかれ (more or less)

人間の中には、前者のようなすべてか無か、あるいは、あれかこれかという発想をする者と、多かれ少なかれという発想をする者がいるようです。例えば、大分昔のことですが、金メダル候補のマラソン選手だった中山竹通は金メダルを逃したとき、「優勝しなければビリでも同じ」と発言しましたが、これはまさにすべてか無かに基づく発言とみなせるでしょう。また、生物学や電気学の分野では、悉無律が成立する場面があります。あれかこれかは、キルケゴールにまさにそのものズバリのタイトルの「あれかこれ

⁷ 初期ギリシア哲学に関してさらに詳細にわかる本訳書として、『ソクラテス以前哲学者断片集』、5分冊+別冊、1996-1998年がある。

か」があります。対照的で両立しない二つの生き方を描写した作品ですが、ひとり人間がふたつの人生を送ることはできず、どちらか一方、あれかこれかの選択だというわけです。おそらく、トリビアルには妥当な議論でしょう。

さて、これらとは対照的な、「多かれ少なかれ」という発想に基づく議論を展開し、一冊の大著まで執筆した哲学者に、恩師のアガシがいます。詳細は、Joseph Agassi, *Towards A Rational Philosophical Anthropology*, The Hague, Martinus Nijhoff, 1977, 189-215. を参照してください。

アガシは、Greek polalization (ギリシア的二極化) という言葉を用いていますが、二分法のことです。

truth : falsity :: nature : convention :: reality : appearance

truth : falsity :: rationality : irrationality

という二つの二極化が挙げられていますが、アガシによると、真理・自然・実在・合理性が同一視され、他方、偽・規約・現象・非合理性が同一視され、この両極化した二分法が哲学的伝統になっていたと言います。そして、アガシは、「私は理想としての絶対的真理を求めるが、それを自然と同一視することは否定する (p. 215)」と主張しています。

多かれ少なかれの観点から、上記の二分法を捉え直した場合、例えば、真か偽かではなくより真理に近いとか、実在か現象かではなくより実在的だとか、合理的か非合理的かではなくより合理的だとかというように、物事を程度問題として見るのが可能になります。

(3) 合理主義 (rationalism) と合理性 (rationality)

合理主義と合理性は混同されがちですが、実は、異なる概念です。前者は立場を意味し、後者は性質を意味するものとしてみるとわかりやすいかもしれません。

1) 主義と性質の相違

例：人種 (差別) 主義と人種

人間を黒人や白人に区別・分類することがありますが、これは肌の色の性質に基づく区別・分類で、事実問題です。他方、例えば、白人至上主義は、事実問題ではなく、立場 (position)、価値判断を表明しています。

白人至上主義を白人が採用するとは限りませんし (逆に、非白人が採用する場合もあるかもしれません)。したがって、白人至上主義イコール白人ではないのは明白です。

2) 合理性についてですが、人間は完全に合理的でも完全に非合理的でもないというのは、人間の性質に関するもので、事実問題です。

では、合理主義のほうはどうでしょうか。合理主義とは、人間はつねに合理的であるという主張をするものでしょうか？人間はつねに合理的であるべきだという立場なのでしょうか？他方、非合理主義とは、前者の主張の否定や後者の立場の否定をするもの

でしょうか？もしこの基準で判断すると、どうも合理主義のほうが非合理主義より分が悪そうですね。事実問題として、人間はつねに合理的だとは言えないでしょうし、つねに合理的であるべきだというのは人間に過大な要求を突きつけているあまり望ましくない当為に思われるからです。そこで判断の基準を変更したらどうなるでしょうか。人間はつねに合理的であるという主張ではなく、人間は多かれ少なかれ合理的であるという主張だとみなせば、後者は事実問題として間違っておらず、人間は(多かれ少なかれ)合理的であるという主張は成立すると言えるでしょう。

3) 人間は多かれ少なかれ合理的であるイコール人間は多かれ少なかれ非合理的である？

人間は多かれ少なかれ合理的であるという主張が成立するならば、逆に言って、人間は多かれ少なかれ非合理的であるも成立し、したがって、人間は多かれ少なかれ合理的であるイコール人間は多かれ少なかれ非合理的であるとなるのでしょうか？私にはそうは思えません。

先に、開かれた社会と閉じた社会に言及しましたが、完全に閉じた社会も完全に開いた社会も存在しないとすれば、したがって、どんな社会も多かれ少なかれ開かれているイコール多かれ少なかれ閉じていると言えるのでしょうか？

単純な例で考えてみましょう。あなたに娘がいて、暖房の効いた部屋から出ようとしているその娘にドアを閉めるように言ったと仮定しましょう。素直な娘は言うことを聞いてドアを閉めました。ところが、ドアを閉めたつもりだったのですが、残念ながら、ドアの隙間がほんのわずかだが開いていた場合、おそらくあなたは、もう一度、「ドアをちゃんと閉めなさい」と言うでしょう。少しでも開いているドアは閉まっているとは認められないからです。そうだとすれば、ドアの開き方には程度があり、ドアが多かれ少なかれ開いているとは言えるけれども、ドアが多かれ少なかれ閉じているとは言えないことになるはずで、ここにも非対称性があります。したがって、ドアは多かれ少なかれ開いているイコールドアは多かれ少なかれ閉じているは成立しません。因みに、ドアの例を社会に置き換えると、社会は多かれ少なかれ開いているとは言えても、社会は多かれ少なかれ閉じているとは言えないこととなります。この基準によれば、事実問題として、完全に開かれた社会は存在しないとしても、開かれた社会は現実に存在することになります。これを合理性に適用すると、人間は多かれ少なかれ合理的であるイコール人間は多かれ少なかれ非合理的であるは成立しないし、また、人間は多かれ少なかれ非合理的であるとも言えず、他方、人間は多かれ少なかれ合理的であるという主張は成立することになるでしょう。

4) 人間は多かれ少なかれ合理的である！

そこで私は、人間は完全に非合理であるという主張や人間は非合理的であるべきだという立場を非合理主義とみなすという提案をしたいと思います。逆に言えば、人間は多かれ少なかれ合理的であるという主張や、さらには合理性に価値を置く立場を合理主義

とみなすという提案だということになります。先に言及した、合理主義を人間はつねに合理的であるという主張をするものとみなしたり、つねに合理的であるべきだという立場だとみなしたりする立場とはまったく異なる対照的な立場だということがおわかりいただけるのではないのでしょうか。

さて、人間は多かれ少なかれ合理的であるとしても、人間はすべて(多かれ少なかれ)合理主義者だとみなすことはできません。事実問題として、人間のなかには合理主義者も非合理主義者も反合理主義者も超合理主義者も存在するからです。しかも、合理主義者が合理的とは限りません。非合理主義者がきわめて合理的な議論をする場合もあります(但し、非合理主義者が合理的議論を尊重しているわけではないことには注意を払うべきでしょう)。私は、合理主義、とりわけ批判的合理主義を標榜していますが、その批判的合理主義とはどんな立場なのでしょう。配付資料の中に、<カフェトーク・文系のチカラ>秋田大×高橋大輔 立花希一さん(倫理学)、見込み違いはよくあります 批判されたら「ありがとう」って誤りを正せばいいの、秋田魁新報、朝刊、2008年10月5日、6頁、がありますが、編集者の相馬高道さんが、批判的合理主義を的確かつ簡潔に表現してくれましたので、是非、その記事も参照していただければと思います。

(4) 批判的合理主義とは

批判的合理主義とは、一言で言えば、批判を尊重し、批判(誤りの具体的な指摘)から学ぶ用意のある態度の推奨です。ポパーは次のように述べています⁸。

批判的方法においては、可能なところではどこでもテストが、そしてなるべくならば実際のテストが用いられるであろうが、批判的方法は私が批判的態度ないし合理的態度と呼んだものに一般化できる、ということを経験した。・・・批判的態度をできるだけ拡大するという要求は「批判的合理主義」と呼べるであろう。

ポパーが「ありとあらゆることを批判する」のが合理的だという主張をしているわけではないことに注意してください。批判的方法についても、「可能なところではどこでも」と但し書きが付いているし、批判的態度を「できるだけ拡大する」と述べ、ありとあらゆることに拡大するとはまったく述べていないからです。したがって、批判的合理主義では、「ありとあらゆることを批判」できない人間は、非合理主義者だということにはなりません。また、すべての人間が合理主義者になるべきだという主張をしている

⁸ K. R. Popper, *Intellectual Autobiography*, *The Philosophy of Karl Popper*, ed. P. A. Schilpp, Open Court, 1974, p. 92. 傍点は引用者。拙稿、「ポパーの批判的方法について」、筑波大学哲学・思想学会、『哲学思想論叢』、第2巻、1984年、25-35ページ。ポパー哲学会編、『批判的合理主義(第1巻)基本的諸問題』、未来社、2001年、再掲、35-46ページ、参照。

わけでもないのです。この点も、何らかの合理主義を擁護するうえで、重要な論点になると思います。

(5) 寛容な批判的合理主義

かつて、同僚のM氏から何を研究しているのかと尋ねられたとき、批判的合理主義と答えたのですが、するとかれから「私は一向宗だが、合理主義者は宗教を非合理だと批判して、宗教を抑圧・排除しようとする。だから、合理主義は嫌いだ」と言われてしまいました。私自身は、合理主義のこのような負の側面にまったく気づいていなかったのですが、言われてみれば、確かに合理主義には不寛容で排他的な面があるようです。そこで、この負の側面を克服する必要性を痛感したのですが、その研究成果が、英文で執筆した、Tolerant Rationalism です。そこでの議論のポイントを紹介させていただきたいと思います。それは、最後に述べる、人類の合理的統一の可能性と深く関係するからです。

1) 批判的合理主義には、先に言及した「批判的態度をできるだけ拡大するという要求」というテーゼとは別のテーゼがあります。それは、「自分が間違っていて、あなたが正しいかもしれない。努力すれば、われわれは真理にもっと近づけるかもしれない」というものです。後年ポパーはこのテーゼの意義を改めて強調しています。自分の誤りの可能性を謙虚に認めているので、他者に対して攻撃的 (aggressive) になる恐れは大きくないと思われまます。自分とは立場の異なる他者に対して寛容であり、さらに尊重してもいると思います。

寛容な批判的合理主義は、他者の自律と自己決定の尊重によって特徴づけられるでしょう。多元主義的社会に相応しいという意味で道徳的で民主的でもあります。

この寛容な批判的合理主義の特徴を箇条書きにしてみます。

1. 批判を軽蔑ではなく、敬意の表明とみなす。
2. 批判だけを提示する。
3. 自分の批判が決定的だとみなしても、批判の受容・拒否の決定を他者に委ねる。
4. 人が合理的かどうかの性急な判断を控え、人を「非合理的」と呼ばないように努める。
5. 各人の判断を尊重し、各人が「わが道を行く」ことを受け入れる。
6. 自分が誤りを犯しやすいものであることを自覚する。
7. 合理主義に敵対する者によって提起される批判にも耳を傾けようとする。
8. 人を敵・味方呼ばわりはしなないように努め、合理的で友好的な人類の統一という観念を促進しようとする。

寛容な批判的合理主義についての結論はこうです。相対主義者や確信的な非合理主義

者を、寛容な批判的合理主義者の中にも含めることはできませんが、かれらに批判的合理主義者になるよう強要することなどありえません。批判の提示を行うだけにして、各人の選択を尊重します。相対主義者や確信的な非合理主義者自身がどんな批判にも耳を傾けようとしなないとしても、寛容な批判的合理主義者のほうには、かれらが自分に向ける批判には耳を傾ける用意があります。したがって、寛容な批判的合理主義者の振る舞いは、合理的で友好的な人類の統一という考えを維持させるといえるでしょう。

詳しくは、Tolerant Rationalism, 科学基礎論学会、*The Annals of the Japan Association for Philosophy of Science*, Vol. 9, No. 5, pp. 245-254. 参照してください。

(6) 人類の合理的統一 (rational unity of mankind) の可能性

合理性には説明の合理性、行為の合理性、信念の合理性、科学受容の合理性、問題解決としての合理性等いろいろな側面がありますが、問題解決の合理性の重要な役割として、言葉による平和的な問題解決およびその帰結としての人類の合理的統一があります。当たり前過ぎて、合理性の問題を論ずる際に看過されてしまう問題でもあるようです。近代以前は、宗教、特にキリスト教による人類の統一がめざされましたが、近代以降、宗教が複数存在することが認知され、しかも宗教間で相互に相容れない信仰・思想が存在する以上、宗教による人類の統一が不可能であることは明白です。

他方、これまでの議論からも理解していただけるように、人類の合理的統一の可能性の追求は今もなお、やりがいのある課題だと思われれます。その核にあるのが、言葉による平和的な問題解決です。おそらく、殺人事件をなくすことはできないでしょうが、戦争廃絶は可能かもしれませんし、まさに諦めずに追求すべき重要な課題だと思われれます。

これこそが、暴力的な問題解決に代わる、平和的な問題解決の方法としての合理性のきわめて重要な役割・任務です。問題には、当然、紛争 (struggle)・衝突 (conflict) も含まれるでしょうが、紛争・衝突を解決するためにもすれば採用されてしまう暴力に代わって、紛争・衝突を平和的に回避する唯一の方法は、議論による合理的な解決だからです。議論による暴力の代替可能性を、ポパーは「革命」とすら呼んでいます。長くなって恐縮ですが、重要な洞察・提言なので、引用させていただきます。

生物はトライアル・アンド・エラーによって進化するが、その誤った試行---あるいは誤った突然変異---は、一般に、誤りの「担い手」であるその生物が除去されることによって除去される。ところが人間においては、叙述と論証の機能をもった言語が進化したことで、これが根本から変わってしまったというのが、わたくしの認識論の重要な要素である。人間は自分自身の暫定的な試行に対して、自分自身の理論に対して批判的になれるという可能性を獲得した。…そのような理論については、著者を殺したり、書物を焼いたりすることなく---すなわち理論の「担い手」を破壊するこ

となく――批判的に論じたり、誤りを明らかにしたりすることができる。

このようにして、われわれは根本的に新しい可能性に到達する。われわれの試行、われわれの暫定的な仮説は、自分たち自身を除去することなく、合理的な議論によって批判的に除去されうることである。実際、これこそが合理的な批判的議論の目的である。…

もし合理的な批判的議論という方法が確立されるとすれば、暴力の使用を時代遅れのものとするだろう。というのは、批判的理性が暴力に取って代わる、これまでに発見された唯一の選択肢だからである。

――この革命――すなわち暴力のもつ除去機能を合理的批判のもつ除去機能によって代替するという革命――のために尽力することが、あらゆる知識人にとって明白な義務である。

暴力や戦争は人間の本性であるとか、歴史の必然であるとかという理由で、人間の歴史から暴力や戦争をなくすことは不可能であるという主張も、一方で強固に存在します。しかしながら、もしポパーの唱える可能性の追求を断念・放棄してしまえば、このような主張に加担し、しかも反ってそれを立証してしまうことにつながってしまうでしょう。この可能性を諦めずに追求することの意義は厳然として存在しているはずだと確信します。しかも、この可能性にかける希望を失っていない人間が存在することも確かなのです。例えば、マララ・ユスフザイ（1997年-）の「1人の子ども、1人の教師、1本のペン、1冊の本が世界を変えられる」という、彼女が16歳の時に国連で行った演説（2013年7月13日）はそれを如実に物語っているといえるでしょう⁹。

⁹ 拙稿、「合理性の諸相」、『秋田大学教育文化学部研究紀要』、第73集、2018年、13-22ページ。